

那珂 57

那珂遺跡群第 123 次調査報告



2010

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が多く残されており、これを後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の都市部周辺における開発事業の増加に伴い、止むを得ず失われていく埋蔵文化財の発掘調査を実施し、失われていく遺跡の記録保存に努めているところであります。

本書は、那珂遺跡群第123次調査の成果を報告するものであります。本調査では弥生時代から中世にかけての集落遺跡の一部を調査し、那珂遺跡群の全容を知る上での多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、費用負担をはじめとするご協力を賜りましたカガミ産業株式会社の皆様をはじめ、多くの方々のご協力とご理解に対し、心からの謝意を表します。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例言

1. 本書は、福岡市博多区東光寺町1丁目131他地内における店舗建設工事に先立って、福岡市区教育委員会が平成20年度（2008年度）に実施した那珂遺跡群第123次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集には本田浩二郎があたった。
3. 本書に使用した遺構実測図・遺物実測図は本田が作成し、製図した。
4. 本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北であり、真北より $6^{\circ}21'$ 西偏している。なお、本書に使用している座標は、国土座標日本測地系を用いている。
5. 遺物実測図の縮尺は土器類を $1/3 \cdot 1/4 \cdot 1/6$ に、銅鏡を $1/1$ に、石器等は $1/2$ の縮尺に統一した。
6. 検出した遺構については、調査時に検出順に通し番号を付した。
7. 銅鏡・銅製品・金属製品については、大庭智子が処理と整理の一部を行った。
8. 本書で使用した遺構写真は本田が撮影した。
9. 本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

本文目次

那珂遺跡群の立地と環境	1
第一章 発掘調査の記録	2
(一) 調査にいたる経緯	2
(二) 調査体制	2
第二章 発掘調査の記録	3
(一) 調査の概要	3
(二) 遺構と遺物	7
1. 瓢塚墓	7
2. 井戸	13
3. 溝	21
4. 土坑	25
5. 掘立柱建物・柱穴列	28
6. 銅鏡	28
第三章まとめ	29

那珂遺跡群の立地と環境

那珂遺跡群は福岡平野の中央部に位置し、御笠川と那珂川に挟まれた洪積丘陵の中位段丘北端部に位置している。この丘陵は花崗岩風化礫層を基盤とし、阿蘇山の火碎流による八女粘土・鳥栖ローム層が上部に堆積して形成されている。那珂遺跡群の北側には段丘中央付近にある東西方向の浅い鞍部を境として比恵遺跡群が存在しており、これまでの発掘調査の成果より両遺跡は一連の遺跡として考えられている。那珂・比恵遺跡群の旧地形の標高は、これまでの調査より5～11m前後であったことが明らかとなっており、その分布範囲は南北2.4km×東西0.5～0.8kmが復元・推定されている。

両遺跡群からは後期旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物が検出され、特に弥生時代から古墳時代・古代にかけての時期は遺構が集中して検出される。弥生時代終末期から古墳時代初頭には那珂・比恵遺跡群を縦断する道路が造営され、この基幹道路を基軸として整然と墓域が形成されることが判明している。古代の時期には遺跡範囲全域に渡って規則的な区画溝が掘削され、官衙に関連すると考えられる遺構群が展開する。中世以降は数ヶ所の範囲で屋敷地跡・区画溝などの遺構が散漫に検出されるのみである。

両遺跡群とともに中世以降の耕地開発や、昭和初期前後の区画整理や戦後の都市開発などにより広範囲に削平を受け、旧地形を窺い知ることは現状では難しい。しかしながら、これまでの発掘調査成果より弥生時代～古代にかけての遺構群は遺跡範囲のほぼ全域に展開していることが判明している。

平成22年現在までに那珂遺跡群では第126次調査、比恵遺跡群では第119次調査までの発掘調査が行われている。

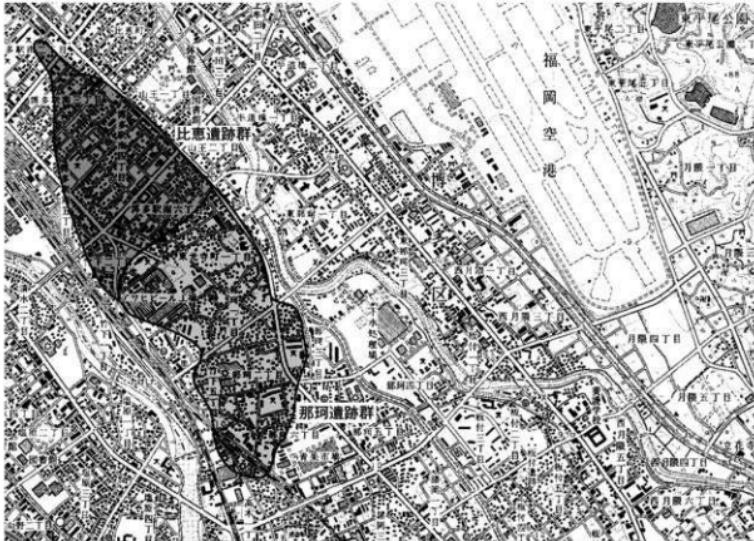


Fig.1 那珂遺跡群の位置 (S = 1/50,000)

第一章 はじめに

(一) 調査にいたる経緯

平成 20 年 6 月 30 日、カガミ産業株式会社より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、博多区東光寺町 1 丁目 131 他地内における店舗建設予定地内に関する埋蔵文化財の有無についての照会(審査番号 20-2-256)が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群内に位置しており、申請地の周辺では数次の発掘調査がこれまでに行われていることから、申請地内においても良好に遺構が存在していることが推測された。これを受け埋蔵文化財課は平成 20 年 7 月 18 日に現地での試掘調査を行った。その結果、現地表面から 20 ~ 100cm ほど掘り下げた黄褐色粘質土層面上において弥生時代から中世にかけての土坑などの遺構と該期の遺物の存在を確認した。これらの遺構は濃密に遺存しており、建設工事に伴う基礎工事によって遺跡の破壊は免れないため、工事によって止むを得ず破壊される部分については全面に発掘調査を行い、記録保存を図ることになった。

発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、平成 21 年 1 月 16 日に着手し、同年 3 月 10 日に終了した。

(二) 調査体制

調査委託	カガミ産業株式会社	代表取締役	田中 裕人
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	山田 裕嗣
調査統括	同 文化財部	部長	矢野 三津夫
			宮川 秋雄(現任)
	同 埋蔵文化財第 1 課	課長	山口 讓治
			濱石 哲也(現任)
	同 埋蔵文化財第 1 課	調査係長	米倉 秀紀
調査庶務	同 文化財管理課		古賀 とも子
			山本 朋子
調査担当	同 埋蔵文化財第 1 課	事前審査係	藤富士 寛(事前審査)
		調査係	本田 浩二郎(本調査)
調査作業	石川洋子	上野照明	大庭智子 小野千佳 小野山次吉 片岡博子
	唐島栄子	許斐拓生	草場恵子 板下達男 渋谷一明 清水 明
	田中トミ子	豊丸秀仁	永田とみ子 中村桂子 野口リウ子 服部弘勝
	濱地静子	林厚子	北条こずえ 村山巳代子 山下智子 結城フヂコ
整理作業	長浦英美子	佐々木涼子	

遺跡調査番号	0854	遺跡略号	NAK-123
調査地地番	博多区東光寺町 1 丁目 131 他	分布地図番号	東光寺町
開発面積	2495.81m ²	調査面積	652.87m ²
調査期間	2009.1.16 ~ 2009.3.10	調査原因	店舗建設

調査中には福岡市教育委員会埋蔵文化財第 1・2 課の同僚諸氏からは多くの助言を頂いた。深く感謝する。

第二章 発掘調査の記録

(一) 調査の概要

那珂遺跡群第123次調査地点は、那珂遺跡群包蔵地指定範囲の北端部付近に位置している。調査は店舗建設に伴う基礎工事・地盤改良工事により埋蔵文化財が影響を受ける恐れのある範囲約652m²について行った。調査予定範囲内の南側については既存建物の半地下式構築物により大きく擾乱されていることが確認されたため調査範囲から除外したが、北半部中央部の地盤改良工事予定範囲については新たに要調査範囲となり「コ」の字状の調査区を設定した。

調査では弥生時代中期後半の甕棺墓を初現として、弥生時代終末期の井戸、古代の区画溝、中世の井戸・堅穴土坑などの遺構を検出した。検出した各遺構の残存状況より調査区一帯が昭和初期の区画整理事業に伴い大きく削平を受け、地形が大きく改変されたことが分かる。

甕棺墓は成人棺3基・小児棺2基が検出されたが、いずれも大きく削平を受けていたため下壺の下半部のみが残存するのみである。甕棺墓は現状で列状に検出されるが、主軸方向の異なる2群に分けられるため、断続的に墓域が當まっていたと推測される。調査区中央部で検出された溝遺構の埋土からも成人棺の破片と見られる大型甕破片などが出土しており、本来は今回検出した以上の甕棺墓が造営されていたものと考えられる。

調査区南端部で検出した弥生時代終末期と考えられる井戸遺構は直径1.2m前後、検出面から底面までは90cm程度を測る。断面観察から井筒は抜かれているが底面に円形の圧痕が残存しており、刳抜材などが井筒として使用されていたと考えられる。

調査区全体では溝遺構が5条確認された。東西方向から北へ20°程度振れる主軸を探る溝遺構は断面形が箱形を呈し、出土遺物より7世紀代後半の時期と考えられる。この溝にはほぼ直交する形で南北方向の溝が2条確認された。この2条の溝は約20m程度の幅を測り、何らかの施設を画した区画溝と考えられる。ほぼ直線的に伸びる溝であるが地形変換点付近でやや北側に振れており、造営時の自然地形を反映したものと推測される。

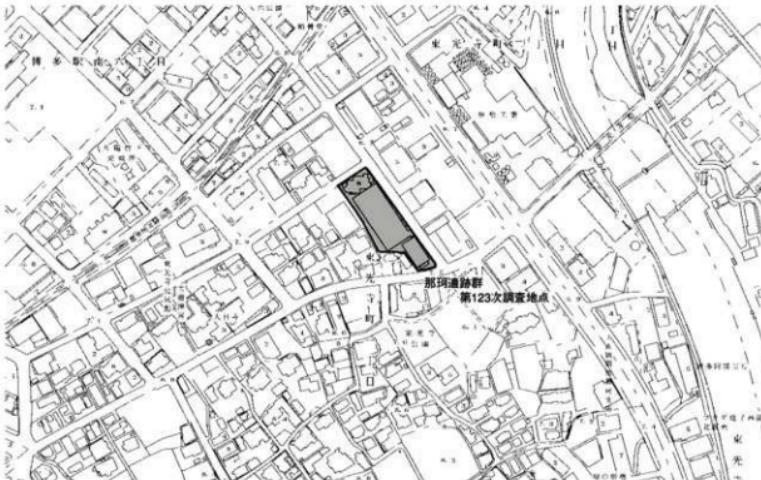


Fig.2 調査区位置図 (S = 1/4000)

調査区北側中央部では中世の井戸遺構・竪穴土坑を複数確認した。中世の井戸（SE-07）は直径2m前後を測る円形の掘方を持ち、掘方の東側に偏った部位に結桶3個を転用した井筒を据えている。地下が帶水環境であったため使用された結桶の遺存状態は良好であり、加工痕などが良好に観察できる。結桶は1組22～23枚の板材（幅8～10cm程度、長さ70cm～1m）を使用し、3箇所を竹表皮で結い上げる。最上段の桶は上端部が破損するものの下半部は良好に遺存していた。最下段の桶は廃絶時に半分が抜き取られており、残りは土圧で東側に傾いていた。井戸最下面付近からは同安窯系青磁碗等が出土しており、これらの出土遺物より12世紀代の遺構と考えられる。このような構造と出土遺物より一般集落で使用されたものとは考えがたく、有力者層などの存在が推測される。この井戸遺構に前後して掘削された井戸（SE-70）は対照的に素掘りで直径70cm程度を測る。この井戸内からは水汲みに使用されたと考えられる手桶が完形で出土した。近接した時期の井戸であるが構造が大きく異なり興味深い。

中世の竪穴土坑は楕円形・方形の平面形を持つものが複数検出された。方形土坑は小型のものと大型のものの二種類が確認できる。これらの方形竪穴土坑はほぼ同一の主軸方向を採っており、出土遺物からもほぼ同時期のものと考えられる。これらの土坑の配置から屋敷地内の構造が復元できる可能性が考えられる。楕円形土坑は長軸2.5m×短軸2.0m前後を測り、検出面から底面までは3.0m程度の深さとなる。出土遺物より12～13世紀中頃の遺構と考えられる。調査区周辺で検出される地下式土坑の可能性も考えられたが、掘り下げの結果、横に伸びる地下部分は検出されず単なる土坑であることが確認できた。

この他の中世に属する遺構としては、銅銭の一括埋納遺構が検出された。弥生時代の甕棺墓に重複するように掘削された土坑内から18枚の銅銭が一括で出土した。那珂遺跡群内でこれまで実施された発掘調査においても、同時に



Ph.1 第123次調査地点全景（南東から）

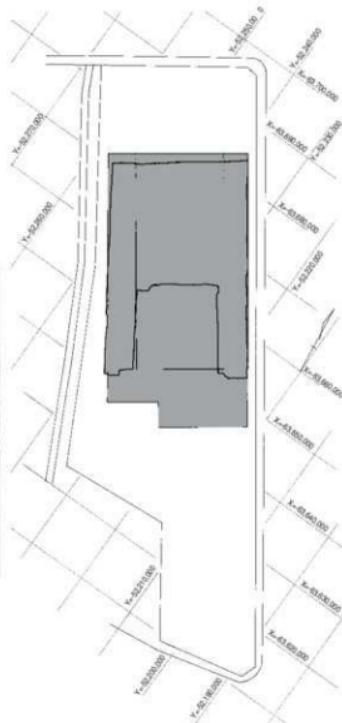


Fig.3 調査区位置図 (S = 1/800)

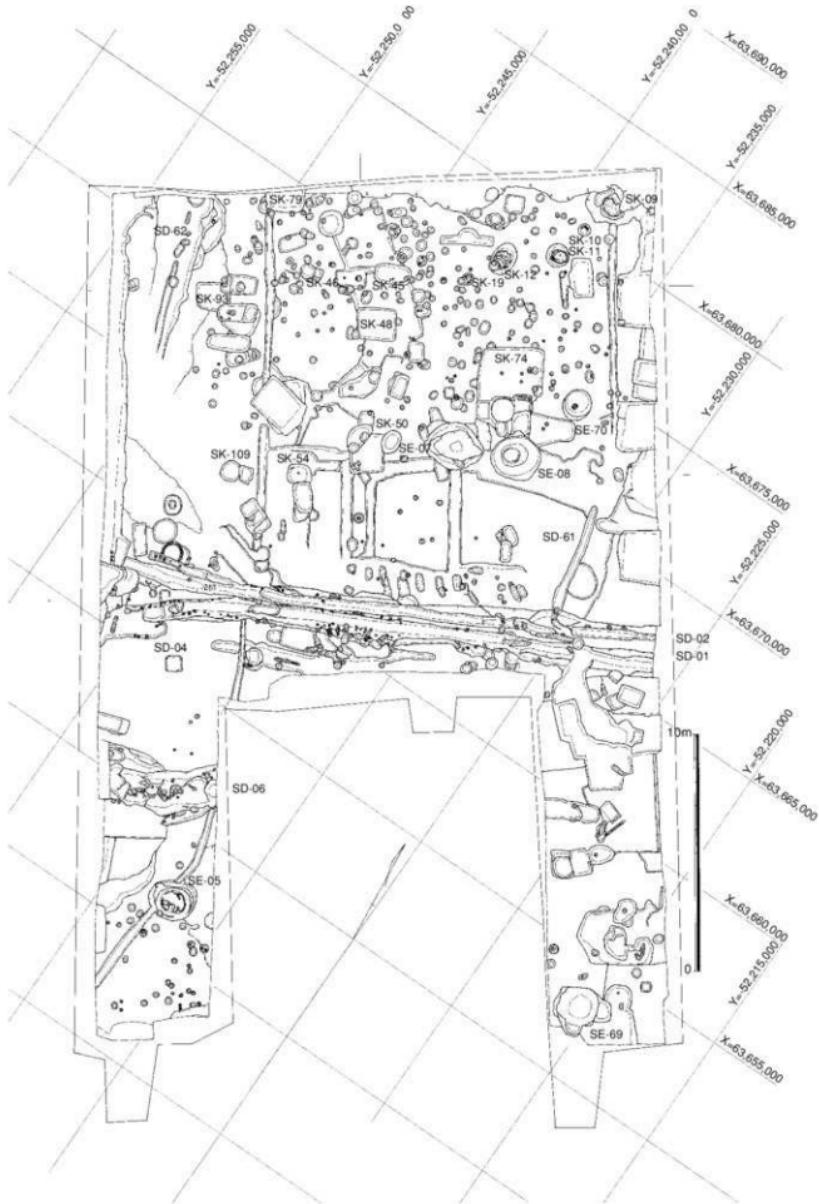


Fig.4 遺構実測図 (S = 1/200)

大量の銅錢が出土したことは珍しく、中世前半期 12 世紀代の那珂遺跡群範囲内北側部分での中世集落の展開について重要な資料を得た。

調査では弥生土器・須恵器・土師器・青磁や白磁などの貿易陶磁器・石斧などの石器・銅錢・桶等の木製品などの遺物がコンテナケース 16 箱分出土した。

今回の調査成果より弥生時代の甕棺墓域が遺跡範囲端部付近まで展開していることや古代に計画的な区画が存在していたことが確認された。また、本調査地点東側には博多と大宰府を結ぶ官道（東門ルート）が存在しており、中世前半期に官道に面して駄目的な役割を持つ屋敷地等が存在していたことを示す重要な知見を得ることができた。



Ph.2 調査区全景（南東から）



Ph.3 調査区北半部全景（南東から）



Ph.4 調査区南西部全景（東から）



Ph.5 調査区南東部全景（南から）



Ph.6 調査区北側中央部（南東から）



Ph.7 調査区中央部遺構検出状況（南東から）

(二) 遺構と遺物

第123次調査では甕棺墓5基・井戸遺構3基以上・土坑・掘立柱建物・区画溝などの遺構群を検出した。井戸を除く遺構のほとんどが検出面から50~80cm程度の遺存であり、昭和初期に行われた区画整理事業によって調査地点一帯が大きく削平されたことが分かる。本来はより多くの遺構群が高密度で展開していたものと考えられる。調査で検出された鳥栖ロームの遺構面は標高5.80~6.70mを測り、調査区西側では区画整理時の用水路掘削によって大きく落ちる。調査区中央から東側にかけては現状で平坦面となるが、本来は御笠川西岸に形成された自然堤防状の微高地形上に位置する。

調査区東側50m付近で実施された第102次調査では官道が検出されており、この官道は古代に造営され中世前半期までは管理・存続していたことが調査成果より判明している。

1. 甕棺墓

今回の調査では3基の成人棺と2基の小児甕棺を検出した。甕棺は平面では直線上に検出されるため規則的に埋設されたようにみえるが、埋葬主軸はそれぞれ異なっており比較的長期間列埋葬の原理で甕棺墓が管理されていたことが想定できる。検出された3基の成人棺はいずれも下甕下半部のみの残存であり、墓坑自体も50cm程度しか残存していない。このような残存状況より100~150cm程度は削平を受けているものと考えられる。また、削平による破損のため酸性土壤が甕棺内に流入しているため人骨などの遺存はなかった。以下に検出された甕棺墓について説明を行う。

SK-09 (Fig. 5)

調査区北側の甕棺墓群北端部で検出した成人棺である。墓坑上面は既存建物基礎工事に伴い大きく擾乱されており、上半部はほぼ消失していた。検出できたのは下甕下半部分のみである。検出面の標高は6.70mで、北側部分は6.40m付近まで擾乱が及ぶ。残存部から判明した埋葬主軸はN-74°-W方向を探る。擾乱によって上半部が大きく損壊されているため棺内も黒褐色粘質土が流入していた。棺内からの人骨などの検出はなかった。確認できた墓坑は梢円形を呈し、長軸1.10m×短軸0.85mを測り、検出面から底面までは60cm前後をかる。墓坑底面は棺底部に向て緩やかに傾斜する。

出土遺物をFig. 6に示した。

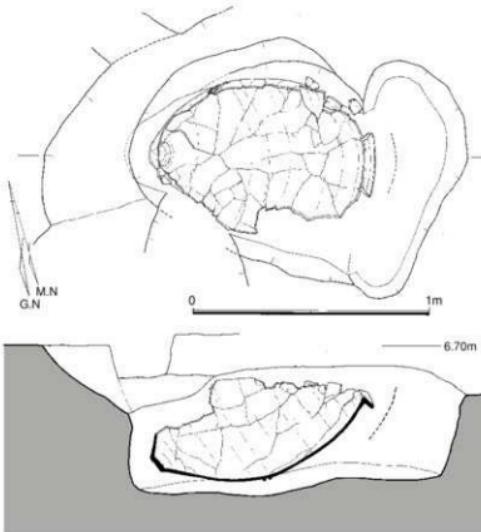
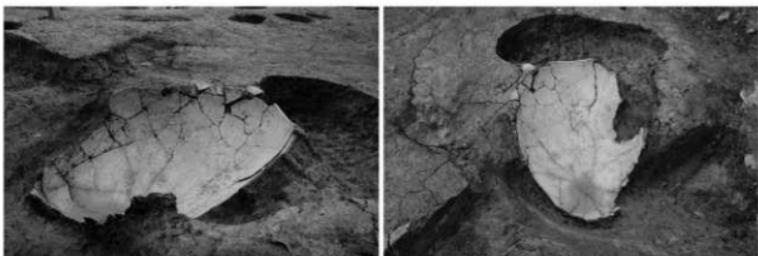


Fig.5 SK-09 遺構実測図 (S = 1/20)



Ph.8 SK-09 検出状況（北から）

Ph.9 SK-09 検出状況（東から）

1は大型甕である。復元口径 56.0cm・底径 9.0cm・器高 88.0cm・復元最大胴径 60.0cm を測る。

口縁部下に一条と胴部下半部に二条の突帯を巡らす。突帯の断面形は三角形および緩いM字形を呈している。

内外器面ともにヘラナデ調整が施され丁寧に器面調整がなされている。焼成は良好で色調は淡褐色を呈する。

甕棺内に他の個体の破片などが含まれていないことから、単棺で埋葬され有機物または板石等で蓋をされていた可能性が考えられる。

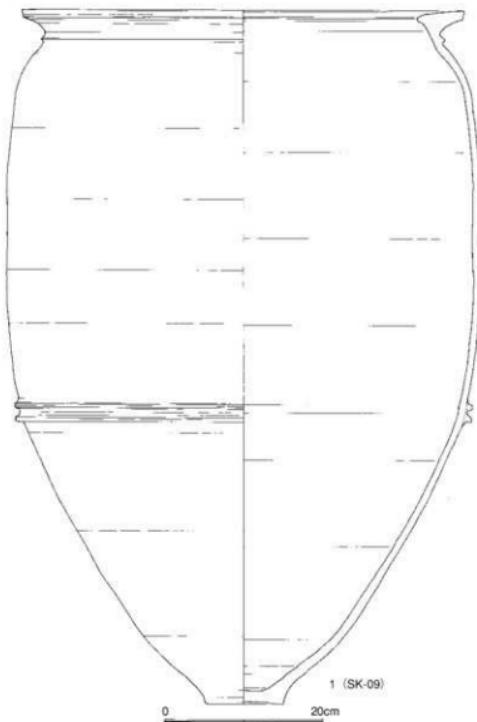


Fig.6 SK-09 出土遺物実測図 (S = 1/6)

SK-19 (Fig. 7)

調査区北側甕棺墓群の南西端部で検出した小兒甕棺である。区画整理によって大きく削平を受けている。検出面は標高 6.70m で、直上まで過去の造成土が堆積していた。検出した墓坑は梢円形を呈し、長軸 50cm 以上 × 短軸 45cm を測る。墓坑も底面付近のみの残存であり、全容は不明確である。現状では単棺で有機物などで蓋をしていたものと考えられる。主軸は N-29°-E を探る。棺内から人骨などの出土はなかった。

出土遺物を Fig. 8 に示した。

4 は弥生土器壺である。削平により胴部最大径部位より上半部が失われる。底部は平底で復元底径は 10.4cm、胴部最大径は 36.0cm、残存高 20.6cm を測る。胴部下半部には刷毛目調整が縦方向で施され、内面には指ナデ痕が残る。焼成は良好で色調は褐色を呈する。

SK-12 (Fig. 7)

調査区北側甕棺墓群の南よりの部分で検出された成人棺である。他の甕棺と同様に上部を大きく削平され、下甕の下半部のみの検出である。底部付近は中世の土坑によって擾乱されており、墓坑端部

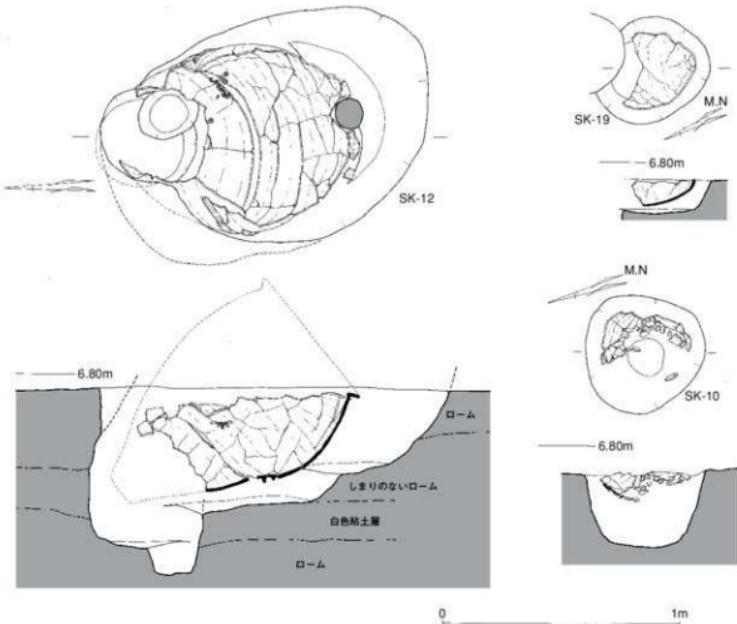
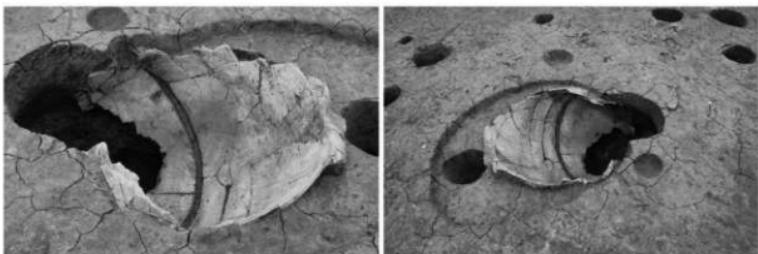


Fig.7 遺構実測図 (S = 1/20)



Ph.11 SK-12 検出状況（東から）

Ph.12 SK-12 検出状況（西から）

の正確な形状は分からぬ。墓坑は検出面での平面形が橢円形を呈し、長軸 1.20m × 短軸 0.95m を測る。使用された甕は接合痕から剥離しており大きく損壊していた。後述するが、甕棺内埋土から銅錢 18 枚が一括して出土した。甕棺内埋土は黒色粘質土で、掘り下げ時に検出しきれなかった中世の土坑内に埋納されたものと考えられる。検出面で下甕口縁部が確認されていることから、合口式であったとしても上甕は削平により既に失われており判然としない。墓坑底面には段を有しており、検出面から底面までの深さは 50cm を測る。主軸はほぼ南北方向 (N=5°-W) を採る。

出土遺物を Fig. 8 に示した。

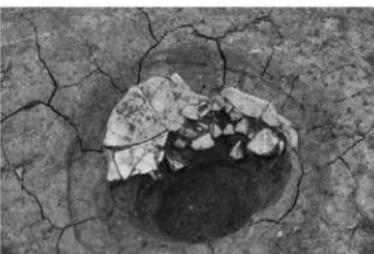
2 は弥生土器大型甕である。底部は中世土坑の攪乱により失われるが、残存高 85.0cm、復元口径 64.0cm、胴部最大径 71.0cm を測る。口縁部直下に一条、胴部下半に二条の突帯を巡らす。内外器面とともに丁寧な板ナデが施される。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

SK-10 (Fig. 7)

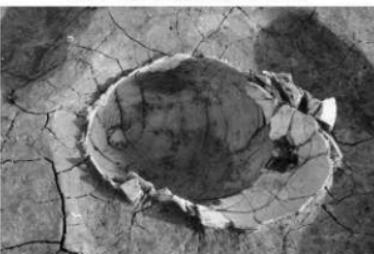
調査区北側甕棺墓群の北側で検出された小児棺である。上部が大きく削平を受け、重複するように中世の土坑が掘削されている。これにより棺材はほぼ全損しており正確な埋置形態は把握できないが、検出される底部と突帯の位置関係より埋葬主軸は N=64°-W 前後の方向が復元できる。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物を Fig. 8 に示した。

3 は弥生土器甕である。削平のため胴部下半部のみの残存である。底部は平底となり、復元底径は 12.2cm、残存高は 20.8cm を測る。胴部下半に二条の突帯を巡らす。突帯の断面形は台形を呈し、摩滅のため器面調整はほぼ失われている。



Ph.13 SK-10 検出状況（南から）



Ph.14 SK-11 検出状況（北西から）

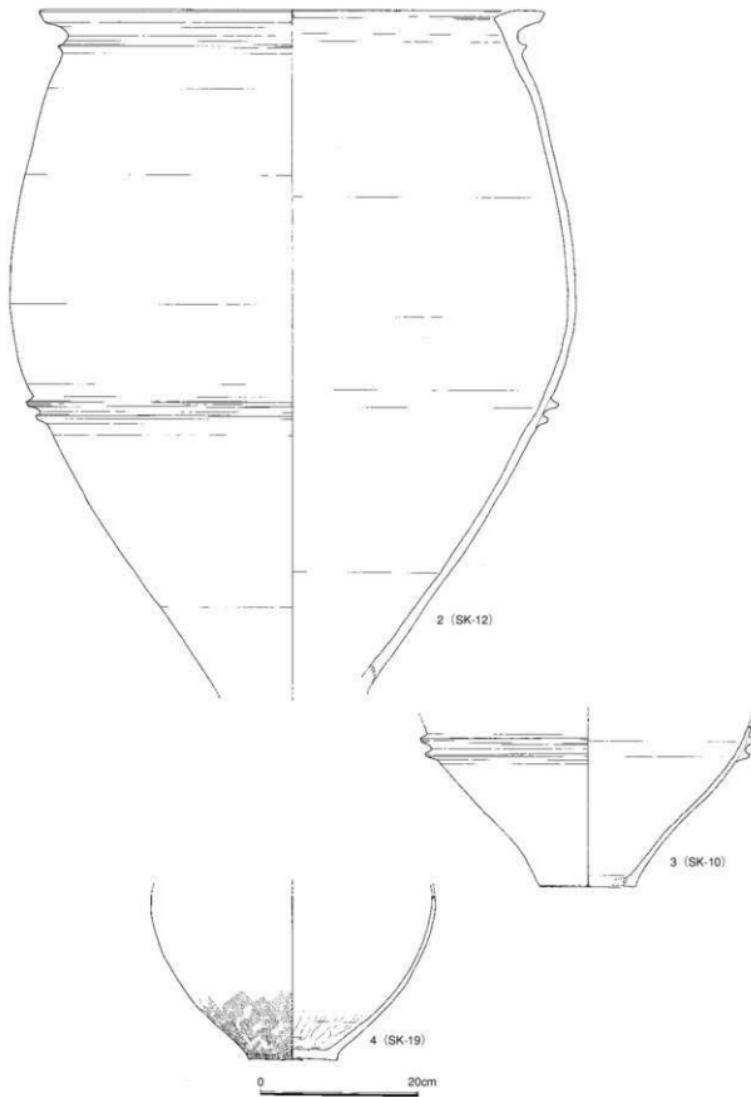


Fig.8 出土遺物実測図 (S = 1/6)

SK-11 (Fig. 9)

調査区北側甕棺墓群の中央部で検出した成人棺である。合口式であり、上甕口縁部の一部が残存していた。検出面での墓坑平面形は不整円形で直径 96 ~ 102cm を測る。墓坑底面には段を有し、検出面から底面までは約 45cm の深さを測る。埋葬主軸は N=64°~W の方向を探る。

他の甕棺と同様に大きく削平を受けており、上甕の大半は消失していた。検出状況より下甕には甕を使用し、上甕には胴部下半部を打ち欠いた甕を正位で使用し、甕口縁部を甕胴部片で蓋をしていったことが分かる。甕棺内には黒褐色粘質土が流入しており、埋土から人骨などの出土はなかった。

Fig. 10 に出土遺物を示した。

5 は弥生土器甕である。上甕として使用された甕に蓋として使用されたもので、当初から破片として使用されたものと考えられる。丹塗磨研土器で、胴部最大径部分に二条の突帯を巡らす。

6 は弥生土器甕である。頭部に一条、胴部上半部に二条の突帯を巡らす。ほぼ直立する頸部をもち、突帯が胴部上半部に位置することから、一般的な甕とは異なるプロポーションを呈する。使用される際に下半部を打ち欠いており、全容は把握できない。丹塗りの磨研土器で、突帯の断面形は台形を呈する。復元口径 34.0cm・胴部最大径 50.8cm・残存高 34.4cm を測る。焼成は良好で、胎土は混和剤を多く含む。色調は橙色～赤褐色を呈する。

7 は下甕として使用された弥生土器甕である。復元口径 46.8cm・胴部最大径 53.0cm・器高 64.2cm を測る。底部は平底で、摩減のため上半部の器面調整は失われるが下半部では刷毛目調整が観察できる。焼成は良好で、色調は橙色～褐色を呈する。

本調査では 5 基の甕棺墓を検出できたが、本来はこれ以上の墓群を形成していたことが、出土遺物より推測される。本調査地点西側 70m の第 49 次調査においても同時期の甕棺墓が確認されており、時期は異なるものの列状の甕棺墓域が形成されていた可能性が考えられる。

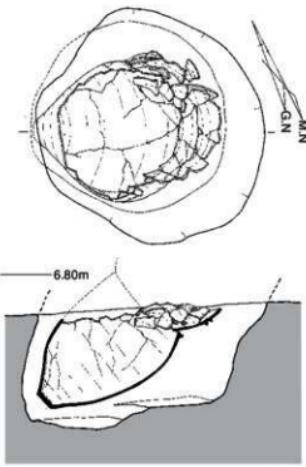


Fig.9 SK-11 遺構実測図 (S = 1/20)



Ph.15 SK-11 掘り下げ状況（南から）



Ph.16 SK-11 上甕検出状況（北から）

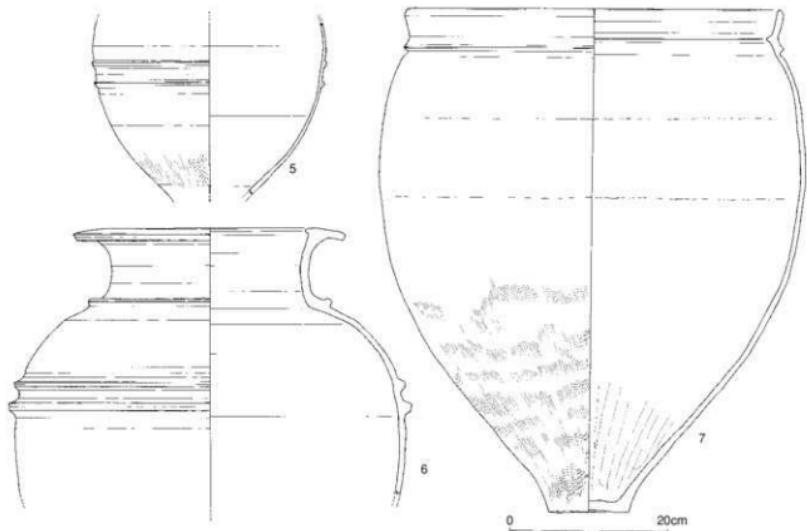


Fig.10 出土遺物実測図 (S = 1/6)

2. 井戸遺構

第123次調査では井戸遺構5基を検出した。調査区がコの字形の変則的な形状であるため、未調査範囲やすでに擾乱を受けた範囲にはさらに存在するものと考えられる。

SE-05とした井戸は調査区南西端部付近で検出された遺構で、出土遺物より弥生時代終末期の時期と考えられる。検出面から90cm程度の残存であり、大きく削平された状況が分かる。この他の井戸はいずれも出土遺物より中世前半期の時期が考えられる。SE-07とSE-08は近接する井戸遺構であり、SE-70はSE-08に時期的にも近接するものあるが、構造的に大きく異なり用途差が想定される。

SE-69は調査区南東端部で検出された遺構で、崩落の危険性があったため半裁のみで完掘は行っていない。断面観察より廃絶後に井筒を撤去したものと考えられる。

以下に各井戸遺構と出土遺物の説明を行う。

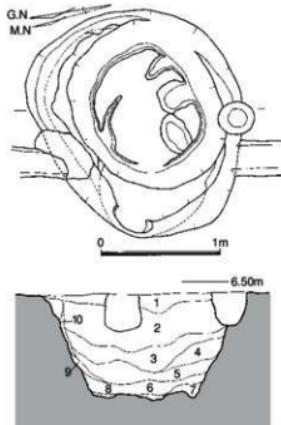
SE-05 (Fig. 11)

調査区南端部で検出した井戸遺構で、平面形は東西方向に伸びる楕円形を呈する。長軸2.0m×短軸1.6mを測り、検出面から底面までは90cmを測る。底面は直径90cm前後をはかり、周囲には幅3cm程度の浅い窪みが観察できる。廃絶時に撤去された井戸枠の痕跡と考えられる。土層断面の観察ではこの圧痕から立ち上がる分層線ではなく、井戸廃絶時に抜き取られ直ちに埋め戻された状況が推測された。この圧痕跡から直径70cm前後の削抜材などが井戸枠として使用されたことが推定できる。

出土遺物を Fig. 12 に示した。

8 は土師器小壺口縁部片である。直線的に開く口縁部を持ち、内面頸部付近に指ナデ痕が残る。色調は褐色を呈する。9 は土師器甕口縁部片である。口縁端部が直立し、内面頸部には平坦面を作り出す。色調は褐色を呈する。10 は土師器甕口縁部片である。直線的に開く口縁を持つ甕で色調は暗褐色を呈する。11 は弥生土器甕口縁部片である。12 は土師器甕口縁部片である。口縁部内面にわずかに段を有する。色調は褐色を呈す。

13 は弥生土器壺胴部片である。断面三角形の突带上に刻目を施す。内外面ともに刷毛目調整が残る。14 は弥生土器甕底部片である。15 は弥生土器甕底部片である。外面上には指頭圧痕が残る。色調は褐色を呈する。16 は弥生土器甕底部片である。これらの出土遺物よりこの井戸は弥生時代終末期から古墳時代初頭の年代が考えられる。

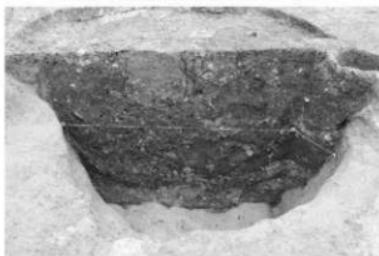


- 1 ローム・ハガ粘土をブロック状に含む黒褐色粘質土
- 2 極小ロームブロックを含む黒褐色粘質土
- 3 黒色粘質土
- 4 極小ロームブロックを含む黒褐色粘質土
- 5 ロームブロックを含む黒褐色粘質土
- 6 ロームブロック・ハガ粘土の混合層
- 7 6 層に黒褐色粘質土が混在した層
- 8 黒褐色粘土層
- 9 4 層と同一
- 10 暗褐色粘質土層・ローム層

Fig.11 SE-05 遺構実測図 ($S = 1/40$)



Ph.17 SE-05 完掘状況 (北西から)



Ph.18 SE-05 土層断面 (西から)

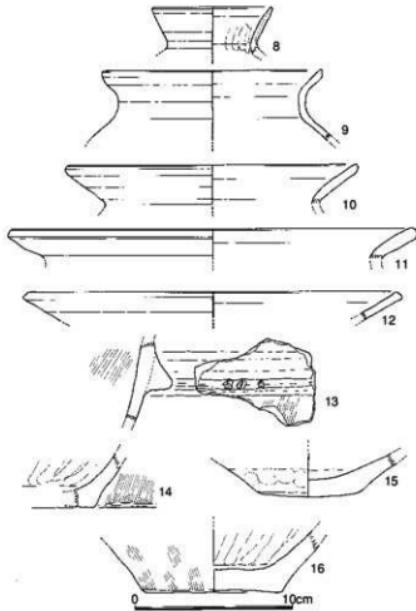


Fig.12 SE-05 出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

SE-07 (Fig. 13)

調査区中央部付近で検出した井戸遺構である。検出時の平面形は梢円形を呈し、暗灰褐色粘質土の埋土により埋め戻されていた。検出した標高は 6.60m 付近で掘り下げる結果、井戸枠は廃絶時に抜き取られたものと考えられ、検出面から 1.60m 以下では壁面のローム層が長期間の帶水環境により大きく剥落する危険性が生じたため完掘は行っていない。下部構造の確認のため、中央部の一部を標高 4.20m 付近まで掘り下げたが、井筒は確認できなかった。標高 4.50m 前後の高さで輪状の白色粘土塊が確認できたが、これが井筒に関連するものかは完掘できていないため不明である。

出土遺物を Fig. 14 に示した。

17・18は土師器小皿である。いずれも底部は糸切り調整される。焼成は良好であるが遺存状況は不良である。色調は褐色を呈する。19は須恵器蓋坏である。口縁端部を欠損する。20は白磁口禿皿である。21は白磁碗である。22は龍泉窯系青磁碗である。疊付まで施釉される。23は龍泉窯系青磁碗である。24は龍泉窯系青磁盤口縁部である。釉は厚く施され明オリーブ色を呈する。25は白磁碗である。高台内に墨書が見られる。26は土師質土器土鍋である。27は滑石製石鍋である。外面に厚く煤が付着する。28は土師質土器捏鉢である。内面には刷毛目調整が施され、外面上部には煤が付着する。29は土師質土器擂鉢である。30は円筒埴輪である。タガの断面形は略台形となる。摩滅が

著しく、器面調整はほぼ失われる。調査区西側 300m に存在する東光寺剣塚古墳から持ち込まれたものと考えられる。これらの出土遺物よりこの井戸は 13 世紀後半代の時期と考えられる。

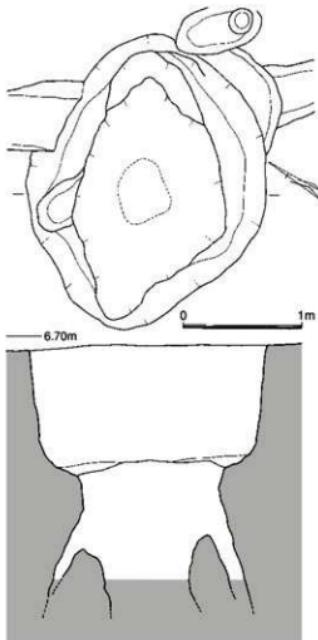
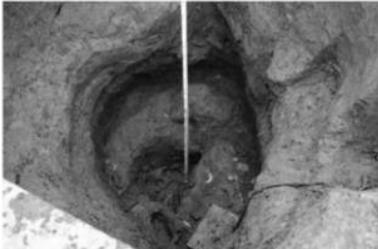


Fig.13 SE-07 遺構実測図 (S = 1/40)



Ph.19 SE-07 掘り下げ状況（南から）



Ph.20 SE-07 掘り下げ状況（西から）

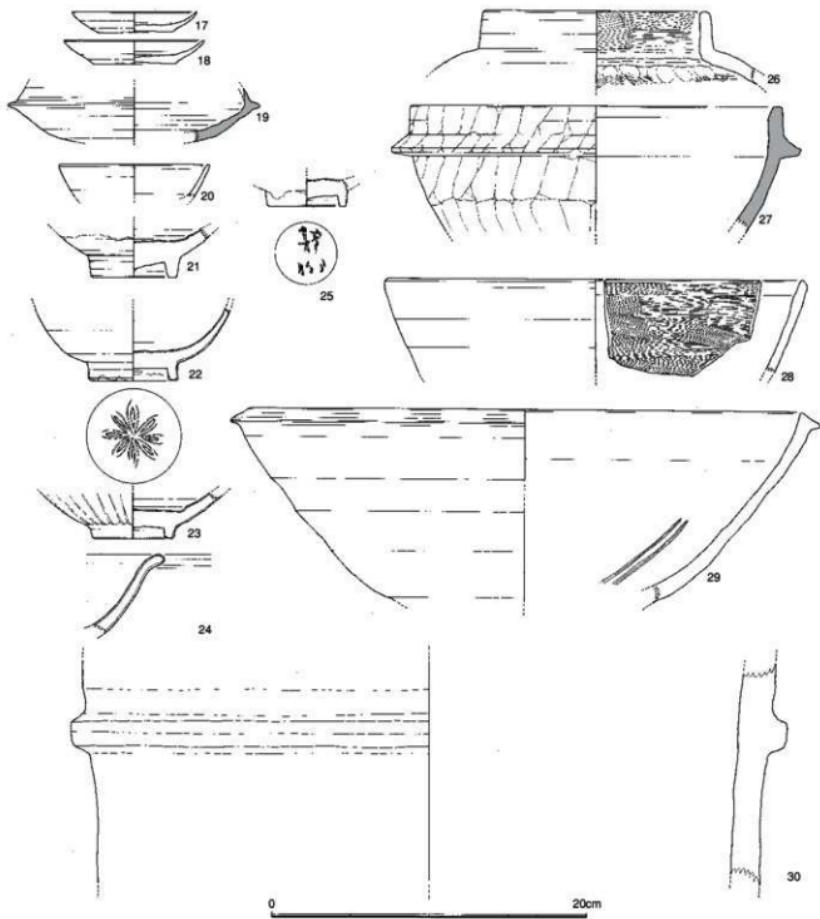


Fig.14 SE-07 出土遺物実測図 (S = 1/3)

SE-08 (Fig. 15)

調査区中央部で検出した井戸構造である。検出時の平面形は円形で直径 1.80m 前後を測る。50cm 程度掘り下げを行ったが井筒の痕跡が確認できなかったため、SE-07 と同様に廃絶時に井戸枠は撤去されたものと考えたが、検出面から 1.20m 程度掘り下げた段階で井筒が確認された。掘り下げの結果、井筒は 3 個体以上の結構を転用したもので、下部の三段分が残存していた。結構は幅 15 ~ 20cm 前後、長さ 80 ~ 100cm 程度の板材 22 ~ 24 枚を竹の表皮で結い上げたもので、良好に遺存していたため板

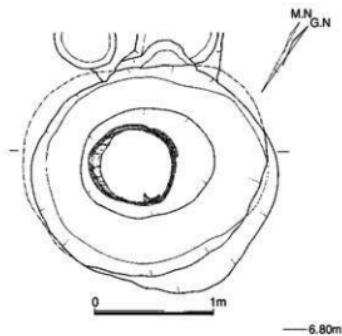
材の表面には加工痕が観察できる。桶は標高4.60mの高さまで残存するが、それ以下は素掘りの状態で標高2.80m付近（検出面から3.8mの深さ）まで続く。埋土から土師器・貿易陶磁などが出土した。

Fig.16に出土遺物を示した。31・32は土師器壺である。底部はいずれも糸切り調整で、色調は褐色を呈する。33は白磁玉縁碗である。34は井筒最下部から出土した青白磁碗である。外面に櫛描文と片切彫で装飾を施す。35は白磁碗である。36は弥生土器甕口縁部片である。37は土師質土器の片口鉢である。38は叩石である。平坦面の一部には擦痕が残り、砥石としても使用されたものか。39は叩石または磨石である。側面に擦痕が明瞭に残る。40は石皿である。

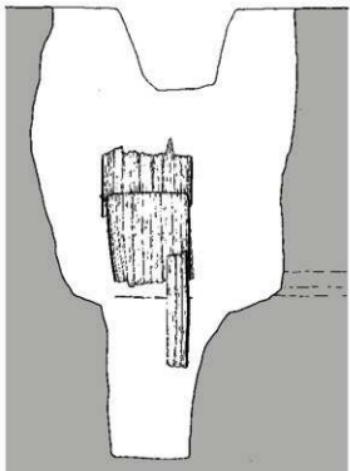
これらの出土遺物よりこの井戸は12世紀中頃の時期と考えられる。



Ph.21 SE-08 掘り下げ状況（北から）



Ph.22 SE-08 井筒検出状況（西から）



Ph.23 SE-08 井筒側面観察状況（南から）
竹の表皮を編み込んだタガで締め上げられる。

Fig.15 SE-08 遺構実測図 (S = 1/40)



Ph.24 SE-08 井筒検出状況（南から）

Ph.25 SE-08 井筒完掘状況（南西から）

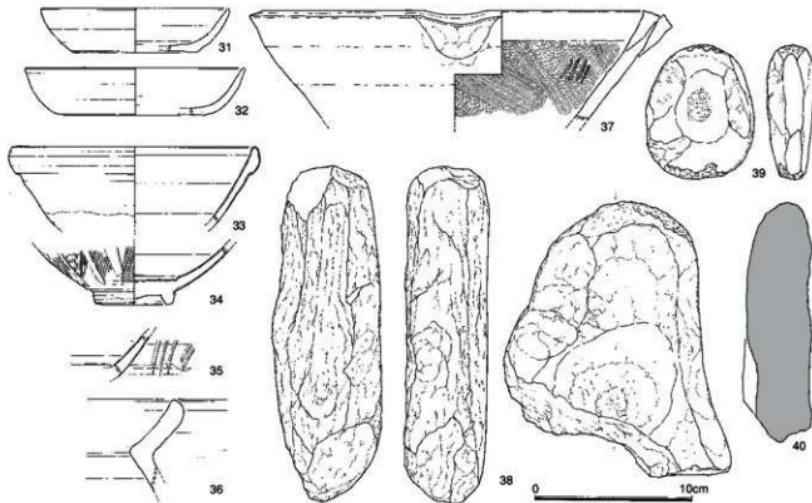


Fig.16 SE-08 出土遺物実測図 (S = 1/3)

SE-70 (Fig. 17)

調査区中央部北東側で検出した井戸遺構である。検出時の平面形は直径 1.20m 程度の円形で、検出面の標高は 6.65m 付近である。掘削開始時には弥生時代に属する井戸遺構と認識して掘り下げを行っていたが、出土遺物が中世に属するものが多く、また埋土が弥生時代のものと大きく異なるため中世の遺構と判断した。他の中世の井戸遺構 (SE-07・SE-08) とは異なり小規模なもので構造も井筒を据えない素掘りの井戸遺構である。用途・使用者の差異から生じた構造差か。検出面から 1.10m 付近から周囲壁面が大きく剥落する危険性が生じたため、この井戸遺構についても完掘は行っていない。掘削は検出面より 2.80m 付近まで行った。井戸埋土は上層部で白色粘土をブロック状に含む黒褐色粘質土であるが、検出面より 1m 以下では暗灰褐色粘質土となる。検出面より深さ 2m 付近で手桶が廃棄された状態で出土した。手桶の持ち手部分には紐などの痕跡がわずかに残っており、井戸が

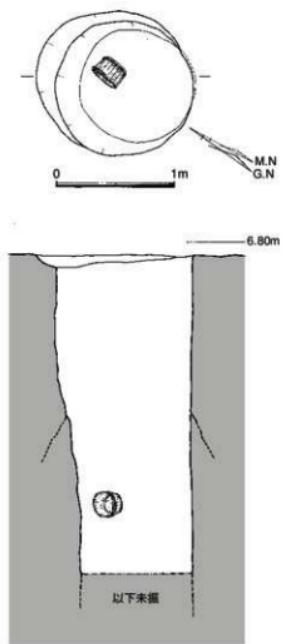
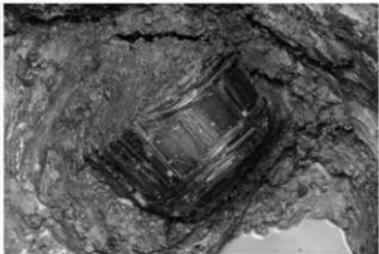


Fig.17 SE-70 遺構実測図 (S = 1/40)

掘削されたかは疑問であり、弥生時代以後に掘削された井戸を再利用した可能性も考えられる。井戸埋土より出土する遺物としては弥生土器から中世と多岐にわたるが掘削年代を決定できる資料は完掘していないため判然としない。第29次調査で検出されたSE-12が類似した形状を探る同時期の井戸遺構としてあげられる。



Ph.26 SE-70 掘り下げ状況（北西から）



Ph.27 SE-70 遺物出土状況（北西から）

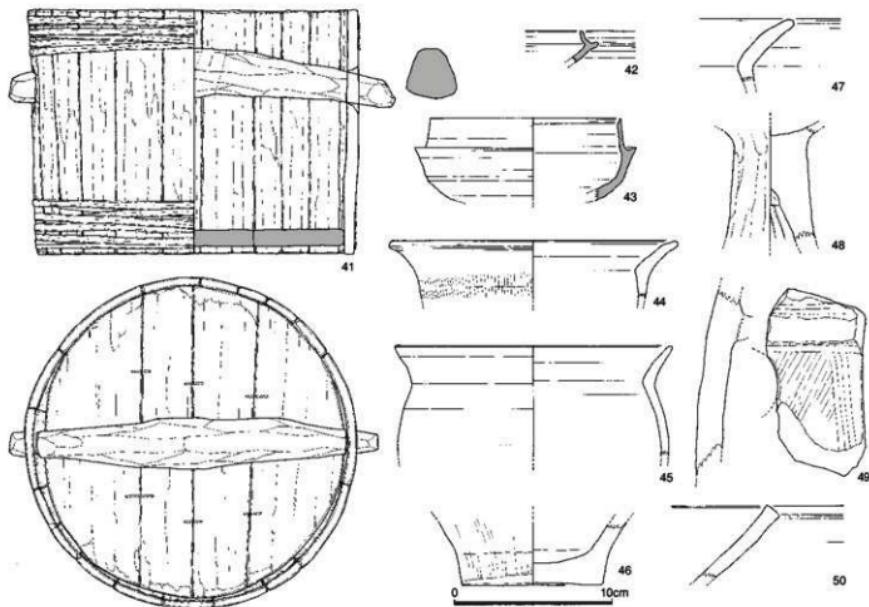


Fig.18 SE-70出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

SE-069 (Fig. 19)

調査区南東端部で検出した井戸遺構である。調査区全体も上部既存建物からの廃油による汚染が認められたが、この遺構周辺は特に上部から染みこんだ廃油が遺構面全体を深く汚染していたため、正確な平面形が確認できなかったため全体的に一段掘り下げを行い平面形の確認を行っている。他の井戸遺構と同様に水の浸食作用により遺構内面に大きく亀裂が生じており、掘り下げとともに壁面が崩壊する恐れがあったため、人力での掘削は行わず重機により南側の半蔵を行って断面観察および底面の検出を行った。土層断面の観察より井筒の痕跡は確認できなかつたため、廃絶時に井筒は撤去されたものと考えられる。掘方内には暗灰色粘土と暗灰褐色シルト層が交互に堆積する。井戸底面の標高は1.95m前後で、標高2.40cm付近から激しく湧水する。

出土遺物をFig. 20に示した。

51～33は土師器小皿である。いずれも糸切り調整された底部を持ち、平均口径は8.0cmを測る。摩滅が進んでおり遺存状態は不良である。54～60は土師器壊である。底部は全て糸切り調整されており、色調は褐色を呈する。これらの出土遺物からこの遺構は13世紀代の時期が考えられる。



Ph.28 SE-69 土層断面（南東から）

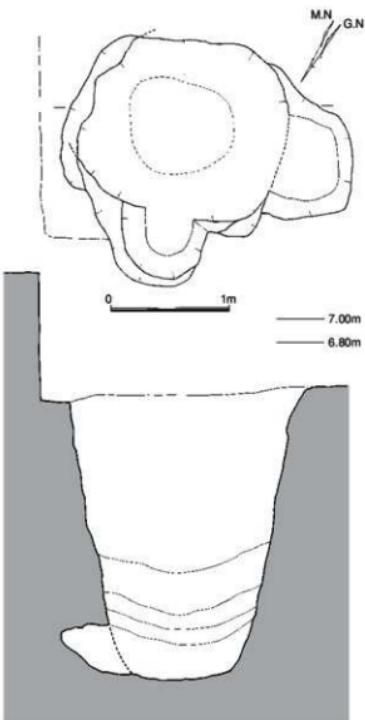


Fig.19 SE-69 遺構実測図 ($S = 1/40$)

3. 溝 (Fig. 21)

調査区全体では5条の溝遺構を検出した。中央部で調査区を横断するように検出された溝遺構 (SD-01・SD-02) は調査区内ではほぼ平行関係となるが、西側部でSD-01が屈曲して北側方向へ展開していく状況となり、異なる原理に基づいて整備された区画遺構であることが分かる。SD-62・SD-61は調査区両端で検出された溝遺構であるがほぼ同一の主軸方向で掘削されており、一連の遺構であるならば幅20m程度の空間を画する遺構である可能性が考えられる。調査区付近に限ったことではないが、遺跡範囲の大半は昭和初期に行われた区画整理により大きく地形が改変されているが、調査区西側の用水路は区画整理以前から存在していることが古地図より判明しており、この用水路自体が古い区画を踏襲している可能性も考えられる。なお、この用水路は調査区西側部分ではSD-62と並行するよう北側へ延びる。以下に各溝遺構についての説明を行う。

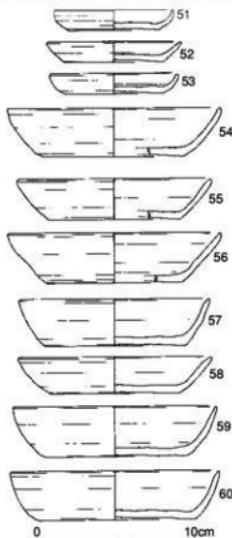


Fig.20 SE-69 出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

SD-01 (Fig. 21)

調査区中央部で検出した溝遺構で、SD-02 を切るように掘削される。断面形は逆台形を呈し、上面での幅は 1.5m、底面の幅は 40cm 程度を測る。検出面から底面までは 60cm の深さを測り、部分的に一段深くなる範囲がある。溝の底面の深さはほぼ平坦であるが、西側端部でわずかに深くなる。中央部付近では N=57°-E 方向の主軸となるが、調査区西半部ではやや南寄りに屈曲し N=49°-E 方向に伸びていく。出土遺物より 12 世紀代後半の時期が考えられる。

出土遺物を Fig. 22 に示した。61・62 は須恵器蓋である。63 は高麗青磁碗である。64 は土師器瓶把手である。65 は同安窯系青磁碗である。66 は灰釉陶器鉢である。67 は弥生土器高坏脚部片である。68 は瓦質土器片口鉢である。69 は軒平瓦である。70 は弥生土器甕口縁部片である。71 は磨製石斧である。側面と刃部に明瞭に研磨痕が残る。85 は弥生土器壺胴部片である。突带上に交差する刻み目を施す。

SD-02 (Fig. 21)

調査区中央部で検出した溝遺構で、SD-01 に切られる。断面形は長方形で上面での幅は 40cm、底面は幅 25cm で検出面から底面までの深さは 80cm を測る。底面はほぼ平坦となるが、SD-01 と同様に西側端部でわずかに深くなり、東側に向かって徐々に浅くなる。調査区中央部では N=57°-E 方向となるが、調査区西側端部で北側に屈曲し N=71°-E 方向に伸びていく。東側方向へは直線的に伸びていくものと考えられる。出土遺物より 8 世紀代の遺構と考えられる。

出土遺物を Fig. 22 に示した。72 は須恵器高坏脚部片である。73 は弥生土器高坏脚部片である。74 は唐津焼である。75 は龍泉窯系青磁碗である。76 は龍泉窯系青磁小鉢である。77 は土師器瓶把手である。78 は白磁玉縁碗である。79 は白磁碗である。80 は須恵器碗である。81 は須恵器蓋杯である。82・83 は須恵器碗である。84 は須恵器蓋である。

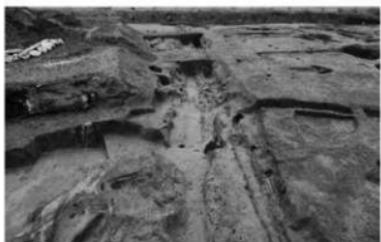
SD-62 (Fig. 21)

調査区西側端部で検出した溝遺構である。遺構のほとんどが区画整理時の用水路拡幅工事による掘削により失われるが、溝底面付近と東側側面が残る。溝の主軸は N=12°-W 前後の方向を探る。

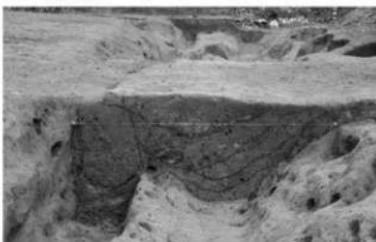
出土遺物を Fig. 26 に示した。99 は須恵器脚付壺の高台部片である。100 は磨製石器である。刃部が磨き出され石包丁の一部とも考えられたが、正確な形状は判然としない。

SD-61 (Fig. 21)

調査区東辺部で検出した溝遺構で、溝の主軸は N=6 ~ 10°-W の方向を探る。この溝の東側には溝と平行する段落ちが検出されるが、既存建物の基礎掘方により大きく擾乱されているため、一連の遺構であるかどうかは確認できない。



Ph.29 SD-01・02 検出状況（東から）



Ph.30 SD-01・02 土層断面（西から）

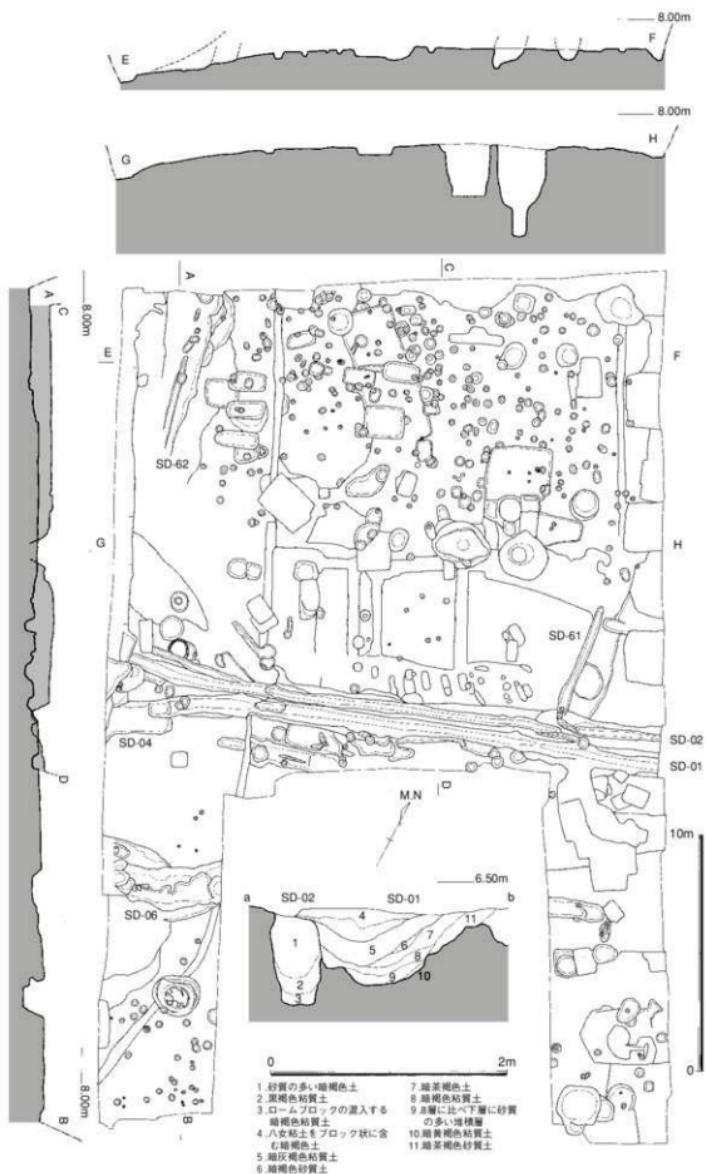


Fig.21 遺構実測図 (S = 1/200 • 1/40)

SD-06 (Fig. 21)

調査区南西部で検出した溝遺構で、北側に向かい弧を描くように屈曲する。幅2m前後を測り、底面には水の浸食によってできた凹凸がある。

出土遺物を Fig. 26 に示した。86は土師器杯である。底部は糸切りされる。87は土師質土器捏鉢である。88は砥石である。砂岩系の石材で色調は暗小豆色を呈する。

出土遺物より 13世紀代の遺構と考えられる。

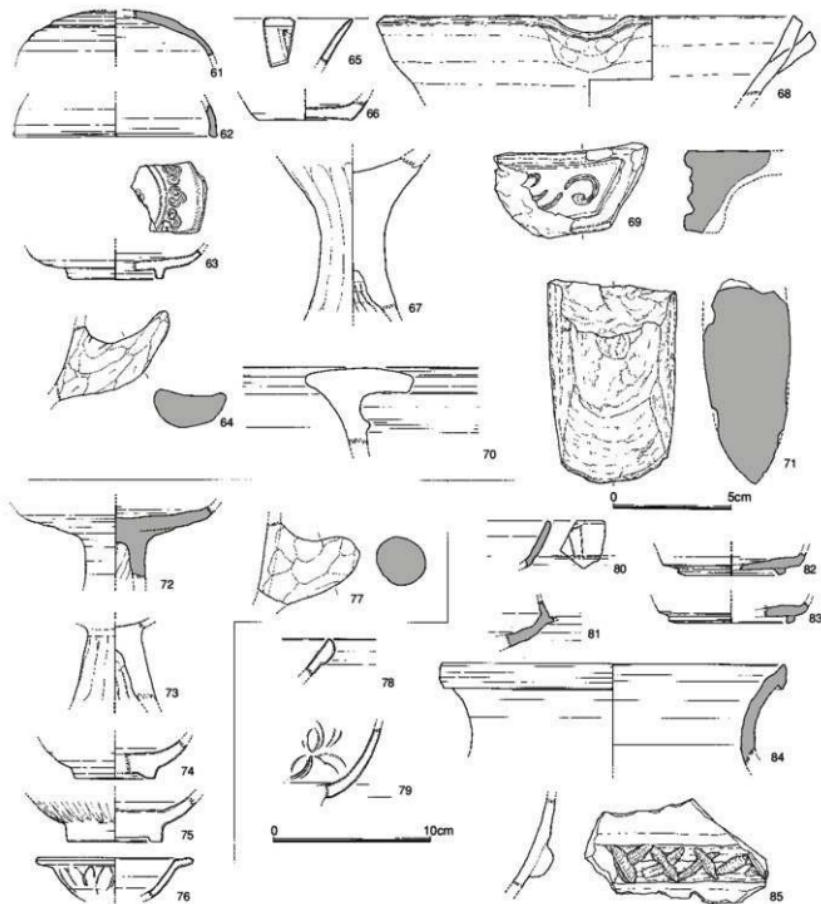


Fig.22 溝出土遺物実測図 (S = 1/2 • 1/3)

4. 土坑

第123次調査地点は区画整理等により大きく削平を受けており調査区中央部から南側にかけて遺構の遺存状況は良好ではない。北側部分についても削平を受けているが中世に属する柱穴列や土坑などの遺構群は残存している。これは削平の結果ではなく、施設としての遺構のあり方と旧地形という要因による差異が大きく影響しているものと考えられる。

土坑や柱穴の多くが中世の区

画溝（SD-01）の北側部分で検出されており、屋敷地などを構成する遺構、施設の主体がこの範囲内に存在していたことを示唆するものであろう。

SK-54 (Fig. 23)

調査区中央部南西側で検出した円形土坑である。長軸1.0m×短軸0.85mの楕円形の平面形を持ち、検出面から底面までは30cmの深さを測る。埋土は暗灰褐色砂質土で土坑底面中央から土師質土器擂鉢が出土した。

出土遺物をFig. 26に示した。89は磚である。94は土師質土器の擂鉢である。内面には明瞭に刷毛目調整が残る。

SK-79 (Fig. 23)

調査区北端部で検出した方形土坑であり、土坑の北側は調査区外に位置するが擾乱されている。現状で一辺1.65mを測り、検出面から底面までは85cmを測

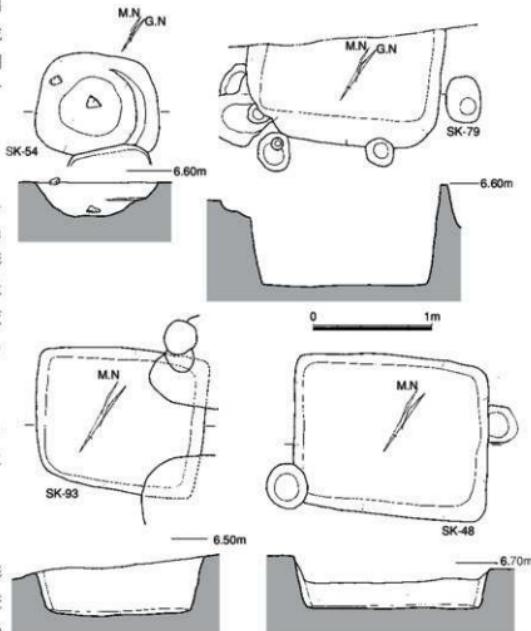
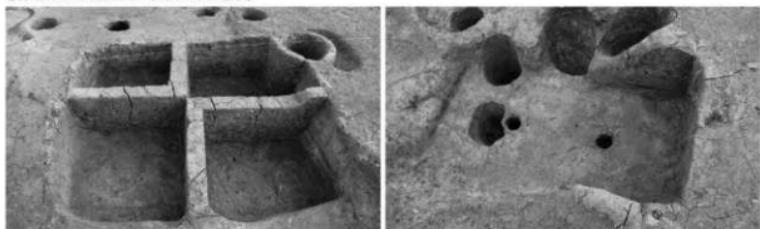


Fig.23 遺構実測図 (S = 1/40)



Ph.31 SK-48 挖り下げ状況 (北西から)

Ph.32 SK-48 完掘状況 (南東から)

る。遺構の主軸はN-52°-E方向を探る。埋土は焼土・炭化物を多く含む汚れた暗橙色粘質土で土師器小皿等が出土した。

SK-93 (Fig. 23)

調査区北西側で検出した方形土坑で、近世の炭焼土坑に一部切られる。長軸1.4m×短軸1.2mを測り、検出面から底面までは45cm前後を測る。主軸はN-52°-E方向を探る。

出土遺物をFig. 26に示した。97は糸切りの土師器壺である。98は朝鮮陶器壺である。

SK-48 (Fig. 23)

調査区北側中央部で検出した方形土坑である。長軸1.65m×短軸1.35mを測り、検出面から底面までは30~40cmを測る。遺構主軸は他の方形土坑と同様にN-52°-E方向を探る。

出土遺物をFig. 26に示した。92は土師器壺である。底部は糸切り調整される。93は土師器瓶把手である。

SK-74 (Fig. 24)

調査区北側中央部の東側で検出した方形土坑である。南側を擾乱により失うが、一辺2.75mを測る。上層より暗褐色粘質土・ロームブロック混じりの暗褐色土・暗黄褐色粘質土・暗黄灰褐色粘土の順に堆積する。底面はほぼ平坦となるが、床面では柱穴などは検出されない。残存部分での遺構主軸はN-54°-E方向を探る。

出土遺物をFig. 26に示した。95は弥生土器大甕口縁部片である。既に破壊された甕棺墓に使用されたものか。96は土師器小皿である。底部は糸切り調整される。焼成は良好で色調は褐色を呈する。

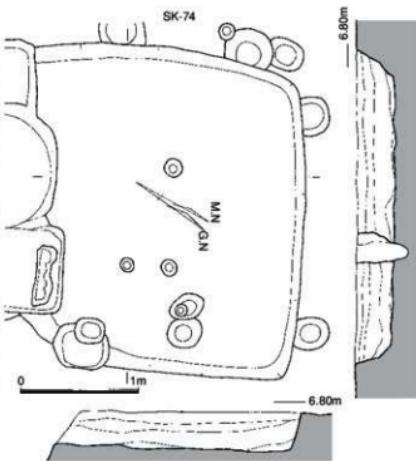


Fig.24 SK-74 遺構実測図 (S = 1/40)



Ph.33 SK-74 挖り下げ状況（北西から）



Ph.34 SD-62 検出状況（北から）

SK-45 (Fig. 25)

調査区北側中央部で検出した長方形土坑である。長軸 1.55m × 短軸 0.85m を測り、検出面から底面までの深さは 35cm 前後をはかる。遺構主軸は N-69°-E の方向を探る。埋土は暗褐色粘質土で土坑底面から土師器壺が出土した。

出土遺物を Fig. 26 に示した。

90 は土師器壺である。底部は糸切りされる。91 は須恵器蓋である。

SK-46 (Fig. 25)

調査区北側中央部で検出した長方形土坑である。長軸 1.30m × 短軸 0.62m を測り、検出面から底面までの深さは 38cm 前後を測る。遺構主軸は隣接する SK-45 と同様に N-69°-E の方向を探る。土坑底面には直径 5 ~ 7cm 程度の柱穴が遺構主

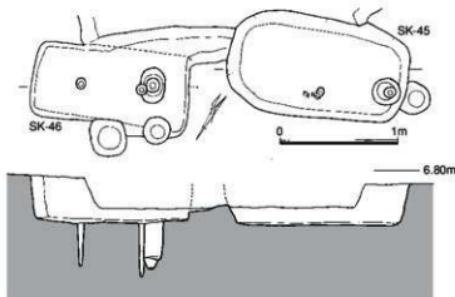


Fig.25 SK45・SK46 遺構実測図 (S = 1/40)

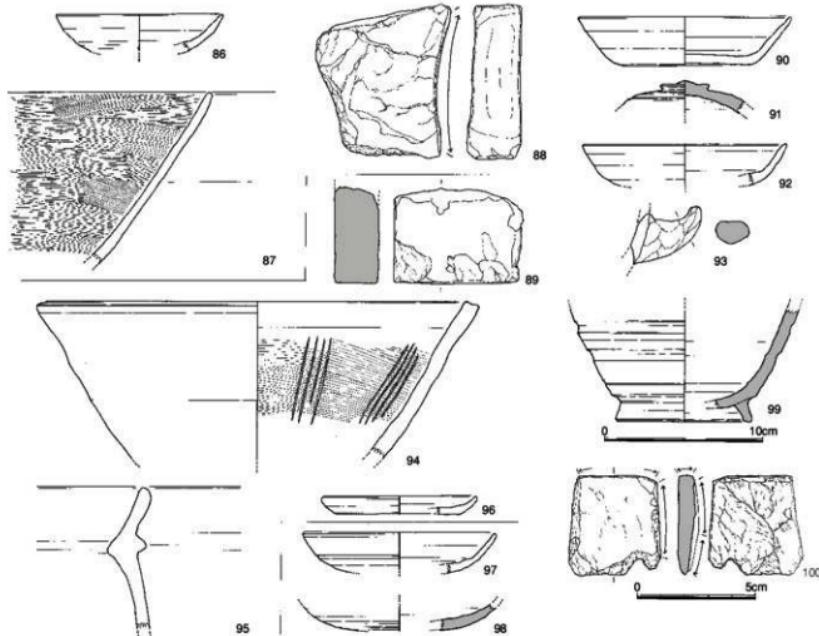


Fig.26 遺物実測図 (S = 1/2・1/3)

軸と同軸で直線的に並んで検出される。土坑底面から 35 ~ 40cm の深さまで黒色粘質土が続く。埋土からは土師器小破片のみが出土する。

5. 挖立柱建物・柱穴列 (Fig. 28)

調査区北側中央部付近で検出した柱穴群から数列の柱穴列が復元できる。いずれの柱穴列も主軸は N-42°-W またはこれに直交する方向を探る。南北方向の柱穴間は 75cm 前後の間隔で並ぶ。いずれの柱穴からも遺物の出土は確認されなかったが、前述の方形土坑群と近い主軸方向で検出されるものであり、ほぼ同時期に存続した建物ととらえることができる。

6. 銅銭 (Fig. 27)

那珂遺跡群第123次調査では、総数18枚の銅銭が出土している。前述のようにSK-12とした甕棺墓埋土内から出土したもので、ほぼ同一の埋土であったため銅銭を埋納した土坑の掘方は確認できなかつた。出土状況としてはほぼ同一の高さに集中して出土しており、土坑内に有機質の容器に収納された状態で埋納されたものと考えられる。水楽通寶が含まれており埋納時期は15世紀代半ば以降と考えられる。出土した銅銭18枚のうち、14枚については判読可能であり、判読結果より Tab. 1 西暦別出土銅銭一覧表を作成した。

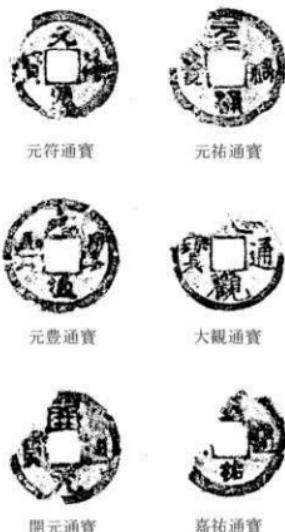


Fig.27 銅銭 (S = 1/1)



Ph.35 埋納銅銭出土状況（東から）

錢貨名	西暦	王朝名	初鑄年	枚数
開元通寶	621	唐	武德4年	1
祥符○寶臺	1009	北宋	大中祥符元年	2
皇宋通寶	1038	北宋	寶元元年	1
嘉祐通寶	1056	北宋	嘉祐元年	1
元豐通寶	1078	北宋	元豐元年	2
元祐通寶	1086	北宋	元祐元年	1
元符通寶	1098	北宋	元符元年	1
聖宋通寶	1101	北宋	建中靖國元年	1
大觀通寶	1107	北宋	嘉祐元年	2
嘉泰通寶	1201	南宋	嘉泰年間	1
水樂通寶	1408	明	水樂6年	1
解讀不能				4
			総数	18

※元寶、通寶かは、不明

Tab.1 西暦別出土銅銭一覧表

第三章　まとめ

以上簡単ではあるが、検出遺構、出土遺物についての説明を行ってきた。最後に那珂遺跡群第123次調査の簡単なまとめを行いたい。

今回の調査では弥生時代中期後半の甕棺墓を初現として、古代の区画溝と中世の建物と共に付随する土坑群と区画溝等の遺構群を検出した。

那珂遺跡群北端縁辺部に位置する本調査区周辺で甕棺墓が検出されているのは、本地点の西側約90mの地点にある第49次調査地点で検出される程度で検出事例は多くない。位置的には遺跡の縁辺部という環境でながら本調査区で検出された甕棺墓群は継続的に列状埋葬として営まれている。第49次調査地点の甕棺はこの延伸方向から大きく外れるものであるが、別の墓群が形成されているのであろうか。

古代の時期に属する遺構としては、SD-02・SD-61・62等の区画を示す溝遺構のみを検出したにすぎない。SD-61・62とした溝遺構はほぼ並行関係となり北側方向へ延伸していくものと考えられる。溝間の距離は約20mを測り、何らかの施設を画するものと考えられるが今回の調査成果からはその性格や規格性については何も明らかにできなかった。

これらの溝に直交するように掘削されたSD-02とした溝遺構は、掘削時の地形を反映した結果なのか西側でわずかに北側方向へ屈曲する。周辺の調査成果を概観してみると、これらの溝遺構と関連する可能性のある遺構は明確には確認できない。強いて可能性を考えるならば、第49次調査で検出された古代の溝遺構が本調査区方向に向かって伸びるものであり、同一の遺構であれば東西方向に伸びる何らかの区画溝である可能性が推測できる。那珂・比恵遺跡群では古代官衙関連遺構が多く検出されているが、地点毎にその主軸方向が異なることが知られている。本調査区から200m程度西側で行われた第18次調査で検出された据立柱建物は8世紀代の官衙関連遺構と報告されている。この建物主軸はN=27°-Wの方向を探るもので、SD-02の西側延伸部分での遺構主軸と直交するものとなる。両遺構間の距離は大きく、必ずしも同一規格に基づく遺構であるとは現時点では断定はできないが、これらの官衙関連遺構はその位置によって主軸を違えており、地形という要因によって大きく影響されていることがわかる。当時の地形からは大きく変化しているため現時点では何の共通点も見いだせないが、可能性の一つとして報告しておく。那珂・比恵遺跡群内の中世に属する遺構の調査事例は多くないが、本調査地点北側約80



Fig.28 遺構配置模式図 (S = 1/400)

mの地点で行われた第29次調査においても、中世中頃の時期と考えられる井戸遺構が複数検出されている。本調査で検出したSE-08のような構造を持つ井戸遺構ではなく、掘方は円形を呈し素掘りで含水層まで達しない雨水を利用する簡便な構造を探る。第29次調査のSE-12は本調査で検出したSE-70と同様に直径1m程度の素掘りの井戸であるが、標高4m前後の含水層まで掘削されている。時期的にも近接するこの井戸からもSE-70と同様に手桶(汲み桶)が出土しており、ほぼ同様の構造と用途が想定される。では本調査で検出したSE-08とSE-70の構造差は何に起因するものであるのか。時期的な要因とするのには調査事例が乏しく確証はない。使用者の階級差を示すものとしては両遺構が2mとあまりに近接して掘削されており、用途・使用方法の違いからの構造差である可能性と捉える方が妥当か。今後の類例の増加を待って検証したい。

Fig.28で示したように本調査地点北半部については、中世には区画溝で画された屋敷地内に含まれていることが想定される。中世前半期の段階では調査区東側に存在する官道はまだ廃絶されておらず、今回出土した貿易陶磁などは官道を通じてもたらされたのであろうか。律令体制が弛緩した段階でも一般人の官道の通行は公的には禁止されていたとされるため、博多遺跡群で荷揚げされた貿易陶磁器などの流通経路の復元も急務であろう。

これまで那珂遺跡群南東側で行われた調査においても区画溝で囲まれた中世居館が検出されており、中世の那珂村の様相を復元する上で重要な知見を得ることができた。

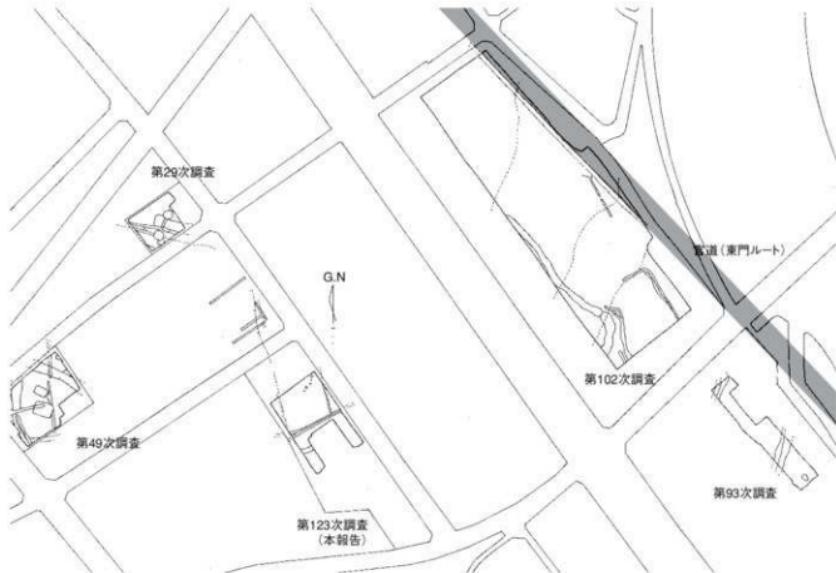


Fig.29 遺構復元図 (S = 1/2000)

報告書抄録

書名	那珂 57 なか 57		
副書名	那珂遺跡群第 123 次調査報告		
卷次			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	第 1083 集		
編集者名	本田浩二郎		
発行機関	福岡市教育委員会		
所在地	〒 810-8621 福岡市中央区天神 1-8-1 TEL092-711-4667		
発行年月日	2010 (平成22) 年 3 月 23 日		
調査期間	2009.1.16 ~ 2009.3.10		
調査面積	652.87 m ²		
調査原因	店舗建設		
所取遺跡名	那珂遺跡群 なかいせきぐん		
所在地	福岡県福岡市博多区東光寺町 1 丁目 131 他		
市町村コード	40132	遺跡番号	0128
北緯	33° 34' 33"	東経	130° 26' 6"
種別	集落	主な時代	弥生／古代／中世
主な遺構	井戸 5 / 瓢箪墓 5 / 土坑 / 区画溝 /		
主な遺物	弥生土器 / 古式土師器 / 土師器 / 須恵器 / 貿易陶磁器 / 国産陶器 / 銅錢など		
特記事項			

那珂 57
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1083 集
 那珂遺跡群第 123 次調査報告
 2010 年 3 月 23 日発行

 発行 福岡市教育委員会
 印刷 正光印刷株式会社

